

● ぼくは、おこられるの大好き太郎 ●
● 親や、先生におこられることが大好き ●
● なのだ。 ●
● そんなぼくは、じゅぎようで一番先に ●
● 手をあげる。 ●
● 「お、太郎、答えてごらん。」 ●
● 「はい、先生、トイレ！」 ●
● 当然。おこられる。でもそれが楽しい ●
● 体育のドッチボールの時、ぼくは、 ●
● ボールをキャッチするやいなや、体育 ●
● 館を飛び出し、にげつづける。 ●
● 当然、あとでおこられる。それが楽し ●
● いのだ。 ●
● 親にだって、同じである。朝ご飯の時 ●
● パンにごはんをぬっておこられたり、 ●
● 宿題を犬のペスにやってもらっておこ ●
● られたりだ。 ●
● そんなことが続いたある日、ぼくは、 ●
● つまらなくなつた。なぜかというと、 ●
● だれもぼくのことをおこってくれなく ●
● なってしまったのだ。 ●
● ぼくは気づいた。おこられているうち ●
● はまだ、愛されていたということに ●

問 1 主人公太郎は（ ）ことが

好き

問 2 主人公は最後に気づいたことは（ ）